

民族舞踊の導入による新体操の芸術性： 《世界新体操選手権大会ブルガリア団体クラブ優勝作品》の構成

山本 里佳（国士舘大学/明治大学大学院情報コミュニケーション研究科）

Artistry of Rhythmic Gymnastics Involving Introduction of Folk Dance Elements: Bulgarian Composition of the Gold Medal-winning 12-Clubs Routine at the Rhythmic Gymnastics World Championships

Rika YAMAMOTO (Kokushikan University / Meiji University School of Information and Communication)

Abstract

Bulgaria and Russia (former USSR), global leaders in rhythmic gymnastics, unveiled highly artistic routines in the 1980s by adding their own national and cultural identities to the composition of their routines. As the bipolar styles in routine composition, with Bulgaria shedding light on folk dance and modern dance and the USSR incorporating classical ballet, significantly contributed to the improvement of artistry in rhythmic gymnastics thereafter, it is of apparent importance to study the composition employed by these countries in the 1980s.

In 1989 the Bulgarian team won the 14th Rhythmic Gymnastics World Championships with the 12-Clubs Routine that featured “folk dance of the village of Radmir” located in the Sofia Region. To uncover the methodology by which folk dance elements helped deepen the artistry of the aforementioned routine, this article incorporates analysis of the Bulgarian National Television footage from 1989, study of documents on folk dance and rhythmic gymnastics, and interviews with choreographers and researchers of folk dance and rhythmic gymnastics.

It was unveiled by analysis that the aforementioned routine represents the history of Bulgaria, from the Ottoman Empire’s rule to the liberation after 482 years, as well as the ethnic identity of its people, in an integrated flow of artistry, proving that the deepened artistry in composition was attained, while still bearing elements of rhythmic gymnastics, owing to elements of folk dance comprising the main axis.

Keywords: Rhythmic gymnastics, Folk dance, Bulgaria

はじめに：問題の所在と目的

1963年第一回世界新体操選手権大会から現在に至るまでブルガリアとロシア（旧ソビエト連邦）は世界の新体操を牽引し続けている（ツヴェトコヴァほか、2002：11）。両国は1980年代のメダル獲得競争のさなか、作品構成に自国のアイデンティティを付加した。個性的な舞踊要素（民族舞踊、モダンダンス）を主としたブルガリアと、クラシックバレエを主としたソビエト連邦の二極の作品構成スタイルは新体操の芸術性^{注1)}向上に大きく貢献した。従って、新体操の芸術性を語る上で1980年代の両国の構成研究は重要である。

ブルガリアは1974年から1999年の主要国際大会で294個のメダルを獲得した（NATIONAL SPORTS

ACADEMY “VASSIL LEVSKI”, 掲載年不明)。その作品群にはブルガリア民族舞踊が多数引用されており、1989年第14回《世界新体操選手権大会ブルガリア団体クラブ優勝作品》では、主に《ラドミル村民族舞踊》が導入されブルガリア民族舞踊の動きを模した手具操作や隊形変化、ステップが使われている。

この《ラドミル村民族舞踊》はダイナミックな動きを特徴とするダンスである。ナトゥリサネという基本ステップや、踊りの終末で演じられる跳び上がりながら下半身を捻るその華やかな動きは、ブルガリア民族舞踊の中でも特徴的だといわれている（Векиловаほか, 2011 : 258）。しかしながら、この《ラドミル村民族舞踊》を新体操に取り入れた作品構成の詳細は明らかにされていない。

そこで本稿では当該作品を民族舞踊要素、民族音楽要素、および新体操に分けて分析するとともに作者およびブルガリア民族舞踊研究者にインタビューを実施し、民族舞踊が新体操の構成に付与する芸術性的一端を探ることを試みた。

1. 《ラドミル村民族舞踊》および《1989年第14回世界新体操選手権大会ブルガリア団体クラブ優勝作品》の概要

当時のブルガリア新体操ナショナルチーム総監督ネシュカ・ロベヴァ^{注2)}は国立民族舞踊学校出身であることから、多くの新体操作品にブルガリア民族舞踊を導入した（NATIONAL SPORTS ACADEMY “VASSIL LEVSKI”, 掲載年不明）。1988年、ロベヴァの指名を受けてブルガリアシニアナショナルチーム団体ヘッドコーチに就任したエフロシーナ・アンゲロヴァ^{注3)}にもその流れは受け継がれた。アンゲロヴァは《ラドミル村民族舞踊》を取り入れたクラブ作品を創作し、1989年の第14回世界新体操選手権大会（ユーゴスラビア・サラエボ）で優勝している（ツヴェトコヴァほか, 2002 : 98）。

導入された《ラドミル村民族舞踊》はブルガリア民族舞踊7地域^{注4)}の1つであるソフィア地方に属している。ソフィア地方は「ショップ」と呼ばれ、音楽には明るく、陽気なイメージがある。《ラドミル村民族舞踊》が有するステップの中では、ベルトを握って踊るオープンサークルのダンス“ラドミルスコ・ホロ”（ラドミルのホロの意）（石坂, 2020）（Shapio, 2000）が有名である。このホロはステップ全体が2つのパートに分割されて繰り返される複雑な踊りで、「ショップ」に多く見られる腿を高く上げて弾むようなランニングステップが特徴である（Векиловаほか, 2011 : 258）（石坂への聞き取り調査2020より）。

2. 先行研究

日本における新体操の先行研究は専門領域を指標に主に次の9点に分類することができる。多い順に①運動生理学②栄養生理学・栄養教育③体育方法学・体育科教育学④体育心理学⑤バイオメカニクス⑥体育哲学・美学⑦体育史⑧感性工学⑨認知科学などが挙げられる。このなかで新体操の演技構成研究は体育方法学・体育教育学（採点規則・難度構成）、体育哲学研究（芸術性）の分野で行われている。新体操の芸術性を学術的視点から記した論文に高橋（1980, 1998/体育方法学）、加藤・石崎・笹本（2000/体育方法学）、柏原（2010/体育哲学（芸術性）、浦谷（2011, 2014/体育哲学）、川瀬（2017/体育哲学）が挙げられるが、いずれも舞踊との関連には触れられていない。一方、前田・佐分利（2000/体育教育学）はラバンの舞踊記譜法を用いて個人演技構成の芸術性の分析を行っているが舞踊的要素については言及していない。舞踊とスポーツ（新体操含む）の関りは樋口（2017, 2020/哲学）、大貫・町田・川瀬らの学術的エッセイ（2019/舞踊学）や、町田の著書（2020）でようやく触れられ始めた。また、ブルガリアの先行研究には①体育方法学②解剖

学/バイオメカニクス③体育教育学④心理学⑤栄養学⑥メディア研究⑦デジタルアーカイブ研究⑧スポーツマネジメント研究などがある。民族舞踊と新体操の関連研究はガンチェヴァ、アルカシアが②体育方法学の分野で民族舞踊をトレーニングとして新体操へ活用する研究を行っているが、民族舞踊と新体操の関わりについての研究はない。

先の東京2020オリンピック競技大会（以下「東京OG」と記す）では、新体操は芸術的スポーツから高難度の技術加点を追求するスポーツにシフトした印象があるが、国際体操連盟（以下「FIG」と記す）のサイトには「新体操はバレエおよびモダンダンスに強く影響されたスポーツと芸術の連結である」と記されており（FIG, 2021）新体操と舞踊は切り離すことができない関係にある。東京OGで個人優勝を飾ったイスラエルのアシュラム選手、団体優勝を飾ったブルガリアも民族舞踊の力によって作品の芸術性を高めている。日本の文化庁は文化芸術に関する基本的な方針で「文化芸術はその国のアイデンティティを支えるとともに、世界に対する国の「顔」である」（文化庁, 2021: 1）と述べており、その言葉を借りるならば新体操に民族舞踊を導入することにより、作品は自国のアイデンティティを帯びるという意義を持つことになる。とりわけ海外の国際大会入賞作品に自国の民族舞踊の導入例が多い訳はこれらの理由によるものであろう。しかし、これまで演技構成と民族舞踊を関連付けた研究はない。そこで本稿では当該作品の構成を分析し、テーマやストーリー性などの芸術性と新体操の技術が民族舞踊によって深化された方法を明らかにする。

3. 研究方法

本稿では主に作品分析とインタビュー調査を実施した。作品分析は、1989年にブルガリア国営放送BNT3で放送されたVTRを基に民族舞踊と当該作品の構成の検討・要素分析を行い、新体操と民族舞踊の連結部分を明らかにした。インタビュー調査では作品に描かれた世界観、表象のかたちを半構造化インタビューによって示した。作品創作者のアンゲロヴァには2020年の2月～4月に合計4回SNS（WhatsApp）を用いた聞き取りを実施した。その内訳は民族舞踊の名称、導入の理由、ステップや手具操作の特徴（1回目）、作品創作のプロセス（2回目～4回目）である。また、2021年6月に2回SNS（Messenger）を使用し、当時のブルガリア新体操の国内事情をブルガリアナショナルスポーツアカデミー教授ギュルカ・ガンチェヴァ^{註5)}に聞き取りをした。さらにブルガリア民族舞踊研究者の石坂史郎^{註6)}には《ラドミル村民族舞踊》の特徴（1回目/対面）、当該作品のステップと音楽の特徴について（2回目～4回目/電話）確認を行った。なお、当時の写真はブルガリア新体操協会に保存されていなかったため、分析対象とした映像の中から民族舞踊を取り入れた特徴的なポーズを抽出し、国土館大学女子新体操部の協力を得て演技写真を撮影した。

4. 創作の背景

本題に入る前に、当該作品における創作の背景について触れておく。日本の多くの文献ではブルガリアの新体操が「国技」として紹介されているが、国技の意味合いは日本の伝統を受け継ぐ国技・相撲などとは異なっている。社会主義国家ブルガリアでは新体操は国技としてより「国策スポーツ」として金メダルが期待されていた。国家からスポーツに投入された資金・組織の在り方・認知度の何れも国の最高のポジションを占めており、新体操だけでなく、レスリング、重量挙げ、陸上にも期待がかけられていた（ガンチェヴァへの聞き取り調査2021より）。そのため、ブルガリアのプライドの保持には、ブルガリアの速い民族音楽に合わせ、前例がない巧みな技術を実施して見せる必要があったのである（Кечарова, 2021）。また、背景の要因

にベルトをにぎるオープンサークルのダンスは、多彩なステップが特徴であり、またその手を離せば手具を扱うことができたことも挙げられる。

5. 結果および考察—作品分析

当該作品を「民族舞踊要素」「新体操要素（手具の技術要素）（身体要素A（バレエ））（身体要素B（新体操））」「民族音楽要素」の3要素あるいは5要素にわけ考察する。図3は作品構成全体を表にまとめたものである。図4は作品全体の隊形変化を示しており、図3と連動している。図3と図4の網掛け部は民族舞踊のベース・第一部と第三部を表し、各要素と他の要素の関りは時系列に①～③、⑤～⑩に示してある。バレエのベースと他の要素との関りは第二部④に示した。なお、図3は波照間（2019：18）の譜語法による分析「表2.《鎮魂の詞》の主な構成」を参考に民族舞踊と新体操に適した要素に改編し作成した。

5-1. 民族舞踊要素

ブルガリア民族は、1396年にオスマン＝トルコの支配下に置かれてから解放までの482年間（外務省、2021）、侵略者の同化政策の攻撃に屈することなしに、自らの民族的性格とブルガリア人としての意識を保った（ディミトロフ、1985：143）。演技開始に相応しい重厚なタパン（Тъпан/太鼓）^{注7)}のリズムを使用した入場（写真2）は、クラブをサーベルに例えて腰に携えることでブルガリアの歴史とブルガリア男性の勇猛さを表現している（アンゲロヴァへの聞き取り調査2020より）。オスマン支配の影響を色濃く残すロドピ地方の男性の踊りの特徴である大きくゆったりとした風格のある動き（По стъпките на българския фолклор、掲載年不明）（図3と図4の①）と、演技開始直後の躍動的な《ラドミル村民族舞踊》（図3と図4の②～③）そして、図3と図4の④の民族音楽との対比が際立つ。

石坂は次のように作品全体のステップの印象を述べている。

この作品の民族音楽を使ったパートにおいて、ランニングステップが頻繁に使用されている。これにはアンゲロヴァ女史がいう「この曲には弾みが存在する」の想いを感じる。ラドミルスコ・ホロ＝弾みである。ラドミルスコの音楽と踊りは、躍動感を感じさせてくれる。ランニングステップは、一步一步をしっかりと踏む。シンプルな動きだが、力強い。演技の最後には観客を引き込んでいる（石坂への聞き取り調査2020より）。

石坂の言及にあるように、アンゲロヴァは躍動的な《ラドミル村民族舞踊》と民族音楽の弾みを巧みに同調させリズムの強弱を創出した。第一部、第三部の軽快なパートでは民族舞踊に特徴的な隊形変化が認められるほか、第二部では本来、男性舞踊手が行う“しゃがんで立つ”動きをあえて使用することによって作品にダイナミズムを付与している。図3と図4の②～③では選手同士が互いに接近したり、離れたりしながら10秒間に3回前後、合計32秒間に7回の隊形変化と空間使用でダイナミズムが演出されている。図4の⑩はブルガリア民族舞踊のステージのエンディングで頻繁に使用される前列の踊り手が跪いてポーズを取る隊形である。この隊形は当該作品のエンディングでも導入されている（写真3）。

5-2. 手具の技術要素

手具の技術要素について2017年度版日本体操協会新体操採点規則に明確な記述があるのでこれを引用する。手具の技術には、各手具の特徴的要素「基礎技術」と、加点対象となる「手具難度要素」がある。本研



写真1. ロドピ地方の民族衣装



写真2. 入場のウォーキング



写真3. エンディングのポーズ

写真1. (Collegium musicm, 掲載年不明) より転載 中央の男性はベルトに2本のサーベルを差している。

写真2. 3. (撮影協力国土館大学女子新体操部)



図1. 回し



写真4. 風車

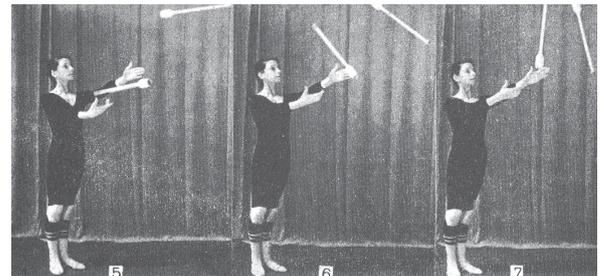


写真5. 二本投げ

(リシツカヤ, 1989 : 63, 65, 66) より転載

究ではこれらを総称して「手具の技術要素」とする。

当該作品のクラブの基礎技術には「打ち（手具と手具、手具と床などを打ち合わせる事）」「風車」「回し」「二本投げ」などが挙げられる。基礎技術の一部には付加的要素を加えることで加点となる場合もあり、その場合は、手具難度要素として扱われる。そのほかに、団体競技に特徴的な手具難度要素として共同作業「交換」「連係」（公益財団法人日本体操協会, 2017 : 59）と、「交換（自分の手具をパートナー選手に投げ、パートナー選手からの手具を受ける技術）」などが含まれる。「連係」は選手全員、またはグループで直接的に、または手具に意味を持たせて関係する共同作業（公益財団法人日本体操協会, 2017 : 63）を指す。クラブの基礎技術は「打ち」と図1「回し」、写真4、5の「風車」「二本投げ」が使用されており、これらの手具の技術要素は図3と図4の②～⑨に示されている。「5-1. 民族舞踊要素」で先述した図3と図4の②～③の隊形変化もクラブの基礎技術を使用して行われている。当該作品には2点の手具の配分があり、一つはスピードと器用性（第二部「民族舞踊要素」全般）、もう一つは空間を意識した高低の投げ（図3と図4の②）である。この配分は民族音楽のテーマやストーリー性の表現に起因する。特に入場時にクラブを小道具的に使用する場面は舞踊的表現として際立っている。

5-3. 身体要素A（バレエ）

新体操はノヴェール、ダンカンの舞踊に始まり、ダルクローズのリトミックなどを經由してソビエト連邦から生まれた（FIG, 掲載年不明）（ツヴェトコヴァほか, 1998, 1999 : 10-11）。よって、新体操の身体要素はバレエを基礎としている部分が多い。当該作品においても民族舞踊が導入されていないパート（第二部参照）の身体要素の殆どはバレエによって構成されている。本稿では文献に従い、ワガノワ派、チェケッテイ派のバレエ用語を用いる。図3の④の特徴にアチチュード（片脚を90度に上げ、曲げた状態で後ろへ出し、もう一方の脚で立つ）（ワガノワ, 1996 : 95）とアラベスク（体を片脚で支え、もう一方の脚をまっすぐに伸ばし、床から離れて90度以上の高さで後ろに上げる）（ワガノワ, 1996 : 98）の2回のアン・ドゥオオル^{注8)}

ピルエット（「外側」の方向への回転運動）が挙げられる。特にアチチュードピルエットは6人の選手が同時に2回転のアン・ドゥオールを実施し、ダイレクトにアラベスクバランスに繋げている。この箇所では身体能力が強調され、Кесароваによる「ブルガリアの速い民族音楽に合わせ、前例がない巧みな技術を実施して見せる必要があった」という意図を確認することができる。

身体要素A（バレエ）を含む作品全体に、東欧各国の民族舞踊に見られるジャンプ「サイドスプリットリープ」「サイドコサック」がある。この2種類のジャンプは舞踊的なイメージ表現の重要なツールとしての役割を果たすために導入されている。つまり、民族音楽を基軸とし、時に民族舞踊の技法を取り入れた演出配分が行われているのである。

5-4. 身体要素B（新体操）

新体操特有の動作は写真6及び写真7のような蛇動運動と、図2前転（アクロバット要素）が認められる。純粋な新体操の身体要素は6回のみで、前転以外の身体要素はストーリー性とテーマ性の付与のために用いられている。選手と選手が腕を交差させながら蛇動を実施したり、図3の④タパンのアクセント6の後に座位の蛇動運動でクラブを両手に保持しながら上体を左右に揺らしたりすることで、重々しくうなだれるような表現が行われている。

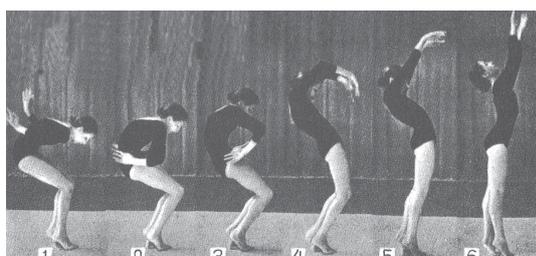


写真6. 前への蛇動運動

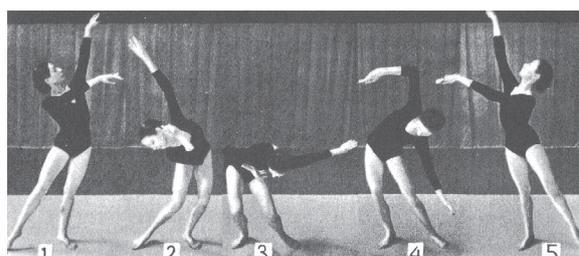


写真7. 左右への蛇動運動

(リシツカヤ, 1989 : 18, 19) より転載

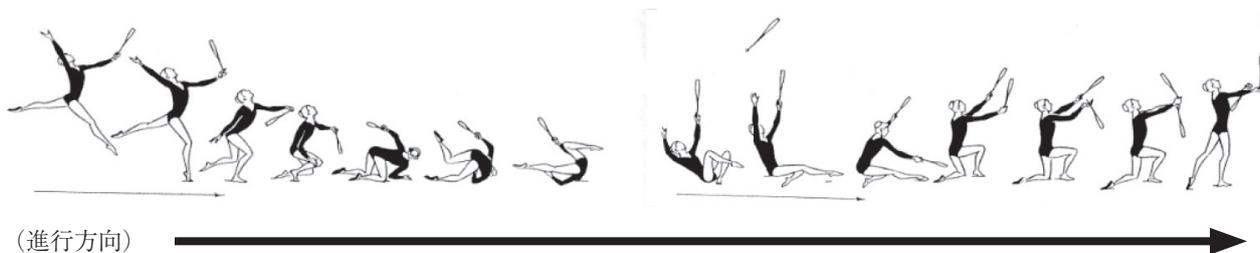


図2. 前転

(リシツカヤ, 1989 : 70) より転載

5-5. 民族音楽要素

ラドミル村の民族音楽は、主に4分の4拍子、または4分の2拍子である (Shapio, 2000)。当該作品の音楽は軽快なパート「第一部、第三部」と緩やかで重厚なパート「第二部」に分けられる。第一部、第三部ではリズム速度に合わせた手具操作とステップによって目まぐるしい隊形変化が行われる。第二部のゆったり且つ重厚なパートでは、ロドピ地方（南ブルガリア）の音楽が導入されている。2020年2月4日のインタビューで、アンゲロヴァはオスマン＝トルコの圧政に屈せず戦い抜いたブルガリアの歴史をロドピの曲を導入して表現する意図を持っていたことを述べている。この曲には民族楽器大太鼓のタパンと、幅広い音域が可能なクラリネットが使用されている（石坂への聞き取り調査2020より）。

アンゲロヴァは選曲について次のように語っている。

ブルガリア民族音楽は特に明るさと、弾みが素晴らしい。この曲には弾みが存在する。そして重厚さがある。それ故に私はこの音楽を選択した。途中、音楽が緩やかで重厚なパートは、曲を探してミックスした。このパートの曲と動きを決定する事には苦労が伴った（アンゲロヴァへの聞き取り調査2020より）。

展開	No.	演技時間	作品構成要素				
			民族舞踊要素	新体操要素			民族音楽要素
				手具の技術要素	身体要素A(バレエ)	身体要素B(新体操)	
第一部	①	0'-0'9"	クラブを腰に携え、サーベルに例えた表現 入場 ウォーキング				タパン(太鼓)のリズム
	②	0'10"-0'41"	リープスタンプ、ランニングステップ、ホップステップステップ、ナトゥリサネ、クロスステップ	連係 打ち・風車・回し 連続的な小さな投げ	ビルエット(パッセ)		ラドミル村の曲
	③	0'42"-0'51"	投げと交換のつなぎはランニングステップで移動	二本投げ(大) 連続交換	ジャンプ(ジュッテ・アン・トゥルナン) ジャンプ(サイドコサック)		
第二部	④	0'52"-1'55"		風車 交換 連係 風車 二本投げ(小) 二本投げ(中) 打ち 投げ・小円 交換 風車	蛇動運動 バランス(手の支持ありグランド・スゴンド・ポジション) ビルエット(アン・ドゥオオール・アラベスク) トゥウル・シエネ バランス(グランド・スゴンド・ポジション) 蛇動運動 蛇動運動 ジャンプ(サイドスプリットリープ) グラン・バットマン・ドゥヴァン ビルエット(アン・ドゥオオール・アチチュード) バランス(アラベスク) トゥウル・シエネ	蛇動運動 蛇動運動 前転 蛇動運動	ロドビ地方の曲 タパンのアクセント1 タパンのアクセント2 タパンのアクセント3 タパンのアクセント4 タパンのアクセント5 タパンのアクセント6 タパンのアクセント7 タパンのアクセント8
第三部	⑤	1'56"-2'03"	つなぎはナトゥリサネで移動	連係	ジャンプ(サイドコサック、グラン・ジュッテ)		ラドミル村の曲
	⑥	2'04"-2'07"		二本投げ(大)	シャッセ ジャンプ(グラン・ジュッテ)	前転	
	⑦	2'08"-2'12"	ランニングステップ クロスステップ	連係			
	⑧	2'13"-2'14"			ジャンプ(サイドコサック)		
	⑨	2'15"-2'17"		連続交換			
	⑩	2'18"-2'23"	リープステップ ランニングステップ ナトゥリサネ				

図3. 《ラドミル村民族舞踊》および《1989年第14回世界新体操選手権大会ブルガリア団体クラブ優勝作品》の主な構成

第二部の特徴は、空間を意識した手具の技術要素と身体運動である。ここではタパンのアクセントとの連動によって民族色が保持されながら手具難度要素（交換、連係など）と身体要素A（バレエ）が実施されている。図3と連動した図4の④（隊形変化図の下にあるA-1～8（AはAccentの頭文字））では隊形変化を行いながら、手具の技術要素の繰り返しによって身体要素A（バレエ）が実施されている。これは、「5-1. 民族舞踊要素」で石坂が「演技の最後には観客を引き込んでいる」と述べた箇所である。図4のA-1～4ではタパンのアクセント毎に高低の変化がある多様な手具操作を展開する。それにより観客はタパンのアクセント毎に徐々に“何かが起きること”を認識するのである。図4の④A-5～7では徐々に観客の期待が高まり、第三部の曲調変化と同時に実施される「連係」（図3と図4の⑤）で演出効果を発揮する。ここではタパンのアクセントの繰り返しの巧みな利用で舞台さながらの演出が創出されている。

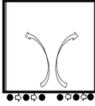
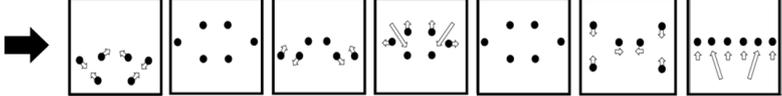
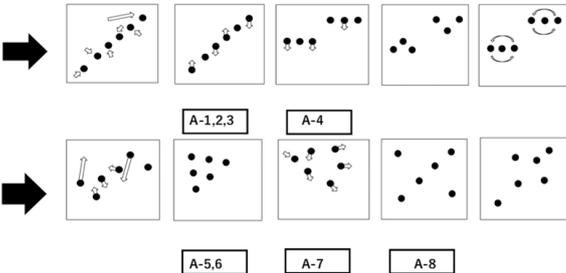
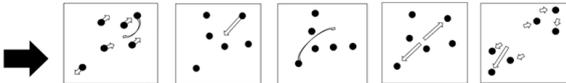
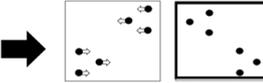
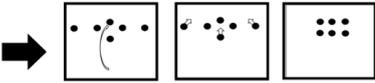
展開	No.	演技時間	隊形と移動
第一部	①	0'-0'9"	 <p>太枠は民族舞踊の隊形を引用している。 ①以降も太枠は同様の意味である。</p>
	②	0'10"-0'41"	
	③	0'42"-0'51"	
第二部	④	0'52"-1'55"	 <p>A = Accentの頭文字 図4. 隊形変化のタバンのアクセントと運動している</p>
第三部	⑤	1'56"-2'03"	
	⑥	2'04"-2'07"	
	⑦	2'08"-2'12"	
	⑧	2'13"-2'14"	
	⑨	2'15"-2'17"	
⑩	2'18"-2'23"		

図4. 隊形変化

6. 結論：

《1989年第14回世界新体操選手権大会ブルガリア団体クラブ優勝作品》の作品構成は三部構成になっている。第一部では、明るく陽気な音楽と弾むような民族ステップを中心とした構成で、ブルガリアの特徴を表現している。第二部は、ロドピ地方のゆったりとしたイメージの音楽と民族楽器タパンのアクセントで隊形移動をしながら様々な身体運動と手具の技術要素が見せ場となっている。また、オスマン＝トルコの支配下における人々の呻きや抵抗を蛇動運動によって表現している。第三部では、シヨップ地方の弾むような音楽に戻り、民族舞踊の軽快なステップ・バレエのジャンプ・手具の連続交換技が次々と繰り広げられ、482年の永きに亘る同化政策に屈することなく民族のアイデンティティを保持し、現代に花開かせた歴史のクライマックスが描写されている。当該作品は民族舞踊要素・民族音楽要素・身体要素B（新体操）・手具の技術要素が有機的に連動し、開始と最後のパートを民族舞踊要素で締めくくっている。

したがって、当該作品は民族舞踊を通して、新体操要素の他に音楽要素や作品のテーマ（物語）要素などが付加され、それらの総合的統一によりひと流れの芸術作品としてのまとまりを持っているといえる。同時にそれはFIGが提唱する舞踊と新体操の連結を示しているといえよう。

国際オリンピック委員会（IOC）はFIG新体操技術委員会に難度の計量的技術評価を要求しているため、現代の新体操は音楽要素や作品のテーマ（物語）に由来する芸術性を失いつつある。町田は「アーティスティックスポーツにおいて技術点の評価対象となる技は、あくまで「芸術性」を創造するための手段（ツール）であって、技それ自体が芸術になるわけではないことに、留意しなければならない。だからこそ、技術点だけを競うようなスポーツは、決してアーティスティックスポーツにはなりえないのである。」と述べている（町田, 2020: 125）。もし、新体操が今後も芸術的表現を伴うスポーツであり続けるならば、芸術の根源・舞踊要素が新体操作品構成の主軸となることが重要であり、身体要素B（新体操）、手具の技術要素は構成に意味を持たせるための手段であることが、本稿の分析でも明確となったのではないだろうか。

謝辞

本稿執筆にあたり、根気よくご指導頂き、如何なる時も支えて下さった波照間永子先生と、貴重なコメントをいただきました査読者、編集者の方々に、この場を借りて御礼を申し上げます。

注

注1) 20世紀初頭の西洋で舞踊を詩や絵画と並ぶ「芸術」と認めるよう求める動きが生じダンカンやバレエ・リュスの舞踊が成功した。保守的な芸術観ではそもそも舞踊は芸術ではなかったことからダンカンもニジンスキーもそれまでのダンスやバレエとは異なる身体表現の形式「モダニズム」を作り出した（尼ヶ崎, 2020: 286）。新体操の芸術は採点規則を基盤とするが、作品創作者の意図は極めて「モダニズム」に近似している。よってここでの芸術性は新しい形式の創造を芸術家の使命とする「モダニズム」の思想を芸術性と捉える。

注2) ネシュカ・ロベヴァ 国立民族舞踊学校出身。ブルガリア新体操ナショナルチーム総監督在任中の1974年から1999年の間、オリンピック、世界選手権などの国際主要大会で294個のメダルを獲得する（NATIONAL SPORTS ACADEMY “VASSIL LEVSKI”, 掲載年不明）。

注3) エフロシーナ・アンゲロヴァ 1980年～1988年ブルガリア新体操ジュニアナショナルチーム総監督。1988年～1990年ブルガリア新体操シニアナショナルチーム団体ヘッドコーチとしてヨーロッパ選手権大会（ヘルシンキ）総合優勝、世界選手権大会（サラエボ）総合優勝を果たす。各国のナショナルコーチを歴任（2000年～2005年/アメリカ、2006年～2009年/スペイン）。メキシコナショナルコーチとして東京OGにメキシコ初の新体操オリンピック選手Rut Castillo Galindo選手を導く。

- 注4) ブルガリア民族舞踊は民族学的に通常6～7つの地域に分けられる。一般的に歴史的背景からトラキアとストラランジャを1つにまとめるが、本稿では独特の祭祀や文化が保存されているストラランジャを1つの地域と数え、7つの地域とする。民族舞踊の地域区分はミズィヤ（北ブルガリア・セヴェルニヤシカ）、ダブルジャ、シヨブルック（シヨプ）、ピリン（ブルガリアのマケドニア地方）、ロドプスカ（ロドピ）、トラキア、ストラランジャである（По стъпките на българския фолклор, 掲載年不明）。
- 注5) ギュルカ・ガンチェヴァ ブルガリアナショナルスポーツアカデミー「ヴァスシル・レフスキー」体操部門教授。ブルガリア新体操協会コーチ諮問委員会、科学委員会メンバーなどを歴任。現役新体操国際審判としても活動中である。主に新体操のトレーニング理論研究・新体操の歴史研究を行っている（NATIONAL SPORTS ACADEMY “VASSIL LEVSKI”, 掲載年不明）。
- 注6) 石坂史朗 1986年ブルガリア国立プロヴディフ芸術学校民族舞踊科入学、ブルガリア民族舞踊の理論と実践を学び1990年～2012年コンサートを中心の文化活動を行う。日本ブルガリア協会理事。2019年ブルガリア共和国「黄金の月桂樹」勲章授章。
- 注7) タパン（英: Tapan）とはブルガリア民族楽器の太鼓である。薄い皮を木枠と弦で締めた円形ドラムで、キヤクと呼ばれる大きなバチと細いバチで皮を叩いて演奏を行う（Balkan Folk Ltd, 掲載年不明）。民族音楽では大型のタパンが使用される。
- 注8) “En Dehours” スペルのアンデオールは『バレエの歴史と技法』の原文にある蘆原のカタカナ表記「アン・ドゥオール」に従った。

文献

- 1) 蘆原英了, 1981, 「第二篇 古典舞踊の原則」, 「第三篇 古典舞踊の技法」, 『バレエの歴史と技法』, 東出版: 東京, 58-212.
- 2) 尼ヶ崎 彬, 2021, 「身体表現の革新」, 『美学の事典 美学会編』, 丸善出版: 東京, 286.
- 3) Balkan Folk Ltd, 掲載年不明, 「Български народни инструменти」, (バルカンフォークLtd, 掲載年不明, 「ブルガリアの国民楽器」).
<https://www.balkanfolk.com/bg/workshop-instruments.php>. (2021年6月13日).
- 4) По стъпките на българския фолклор, 掲載年不明, 「Български народни хора Стил характер на танците в различните фолклорни области ни България」, (ブルガリア民族舞踊のステップ, 掲載年不名, 「ブルガリアの民族 ブルガリアの民族学的地域差によるダンスの形式とキャラクター」).
<https://taratanci.com/folklor/tantzite-po-folklori-oblasti-na-bulgaria/>. (参照2021年6月15日).
- 5) Collegium musicm, 掲載年不明, 「Bulgarian National Folklore Ensemble Philip Kutev」, (Collegium musicm, 掲載年不明, 「ブルガリア国立民族舞踊団フィリップ・クテフ」).
<https://www.collegiummusicum.org/ensembles-roster/folklore-ensembles/bulgarian-national-folklore-ensemble-philip-kutev/>. (参照 2021年6月26日).
- 6) 文化庁, 2021, 「「文化芸術の振興に関する基本的な方針」の評価と課題について」, 『審議のまとめ骨子案』, 資料5: 1.
- 7) 外務省, 2021, 「8 略史」, 『ブルガリア共和国基礎データ』, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bulgaria/data.html>. (参照2021年7月15日).
- 8) Ганчева, Алкайя, 2017, “Ролята на фолклорните танци в усъвършенстването на ритмичните способности в художествената гимнастика“ Сборник доклади от международната научно-практическа конференция, Актуални проблеми на физическата култура, НСА ПРЕС, София,1-7. (ガンチェヴァ、アルカイア, 2017, 「新体操の能力向上における民族舞踊の役割」『国際科学実務会議「身体文化の現状問題」からの報告集』NCA PRES, ソフィア, 1-7).
- 9) 波照間永子, 2019, 「志田房子作 琉球舞踊《鎮魂の詞》の表象 一空間・音・身体の重層性一」, 『比較舞踊研究』, 第25巻: 13-22.
- 10) 樋口 聡, 2017, 「ヘーゲル『美学講義』にもとづく芸術の結合と離反」, 『体育の科学』, 67(3): 201-205.
- 11) 樋口 聡, 2020, 『美学の事典 美学会編』, 丸善出版: 東京.
- 12) I. デイミトロフ, M. イスーソフ, I. ショボフ: 寺島憲治編訳, 1985, 『世界の教科書=歴史 ブルガリア1』, ほるぶ出版: 東京, 143.
- 13) International Gymnastics Federation, 掲載年不明, 「DISCIPLINES RHYTHMIC GYMNASTICS DISCIPLINES

- Presentation」, (国際体操連盟, 掲載年不明, 種目 新体操 概要). <https://www.gymnastics.sport/site/pages/disciplines/pres-rg.php>.
- 14) International Gymnastics Federation, 2017, 『2017年-2020年新体操採点規則』, 公益財団法人日本体操協会: 東京, 59-63.
 - 15) 柏原全孝, 2010, 「スポーツと美的なもの: 新体操という困難から」, 『追手門学院大学社会学部紀要』, 第4号, 17-32.
 - 16) 加藤陽子, 石崎朔子, 笹本重子, 2000, 「新体操の団体競技における芸術的価値判断とその評価について」, 『日本女子体育大学スポーツトレーニングセンター紀要』, Vol. 03: 13-19.
 - 17) 川瀬雅, 2019, 「舞踊らしさを追い求める新体操というスポーツ」, 『舞踊学会ニューズレター』, 第16号, 6.
 - 18) 川瀬雅, 2017, 「新体操における美と形式」, 『日本体育学会予稿集』, 68(0): 64-64.
 - 19) Кесарова, 2021, 「ВЕЛИКИТЕ ИМЕНА В БЪГАРСКАТА ХУДОЖЕСТВЕНА ГИМНАСТИКА АНСАМБЪЛ-СВЕТОВНИ ШАМПИОНИ В САРАЕВО 1989 г. ЗЛАТЕНМЕДАЛ В МНОГОБОЯ ЗЛАТЕНМЕДАЛ В СЪЧЕТАНИЕТО С 12 БУХАЛКИ」, 『Вългарска федерация художествена гимнастика-Официална страница』 (ケサロヴァ, 2021, 「ブルガリア新体操団体の偉大な名称-1989 サラエボ世界チャンピオン 総合金メダル12クラブ作品」, 『ブルガリア新体操協会公式ホームページ』.
<https://www.facebook.com/BGRGfederation/posts/2108525292551638/>).
 - 20) リシツカヤ: 加茂佳子ほか訳, 1989, 『ソ連の新体操—その科学的トレーニング—』, 不昧堂出版: 東京, 18-70.
 - 21) 前田裕美, 佐分利育代, 2000, 「新体操競技の芸術的価値に関する研究」, 『日本体育学会大会号』, 51(0): 385.
 - 22) 町田樹, 2019, 「競技と舞踊のあいだ —アーティスティック・スポーツという未開拓領域」, 『舞踊学会ニューズレター』, 第16号: 4.
 - 23) 町田樹, 2020, 「第Ⅲ部 鑑賞されるアーティスティックスポーツ 第1章 アーティスティックスポーツの批評—意義と方法 1 採点規則の競技横断的分析 1-1 アーティスティックスポーツにおける競技の採点構造」『アーティスティックスポーツ研究序説 フィギュアスケートを基軸とした創造と享受の文化論』, 白水社: 東京, 125.
 - 24) NATIONAL SPORTS ACADEMY “VASSIL LEVSKI”, 掲載年不明, 「Rhythmic gymnastics」, (国立スポーツアカデミー “ヴァスシル・レフスキー”, 掲載年不明, 「新体操」.
「Coaches」, <https://www.nsa.bg/en/faculty/department/branch,48/subpage.96>.
「Full Prof. Giurka Gantcheva Ph.D.」, <https://www.nsa.bg/en/teacher.119>.
(参照2021年7月25日).
 - 25) 大貫秀明, 2019, 「二卵性双生児としての ダンスとスポーツ」『舞踊学会ニューズレター』, 第16号, 2.
 - 26) Shapio, 2000, 「Radomirsko Horo (Bulgaria)」, 『Glossary of Folk Dance Terms』,
<http://www.folkdancenotes.com/dancenotes/radomirs.htm>. (参照2021年6月18日).
 - 27) 高橋衣代, 1980, 「団体演技の空間構成と隊形変化に関する一考察-2-第9回世界新体操選手権大会」, 『藤村学園東京女子体育大学紀要』, (15): 29-41.
 - 28) 高橋衣代, 1997, 「新体操競技の個人演技における徒手要素と難度要素に関する研究 (1) —オリンピックロサンゼルス大会 オリンピックアトランタ大会—」, 『日本体育学会大会号』, 48(0): 524.
 - 29) 高橋衣代, 1998, 「新体操競技の個人演技における徒手要素と難度要素に関する研究 (2): 第21回 (ハンガリー) 第21回 (ドイツ) 世界選手権大会 (体育方法)」, 『日本体育学会大会号』, 49(0): 541.
 - 30) Цветкова, Гигова, Ђатова, 2002, 『1989 Сараево 1991 Атина 1992 Брюксел』, 50 години Българска художествена гимнастика, Българска федерация по художествена гимнастика: Sofia, 1-99. (ツヴェトコヴァ, ギゴヴァ, バトヴァ, 2002, 「1989サラエボ 1991 アテネ 1992 ブリュッセル」, 『ブルガリア新体操50年』, ブルガリア新体操協会: ソフィア, 11-99).
 - 31) 浦谷郁子, 2011, 「新体操における美の理論に関する一考察—採点規則との関係において—」, 『日本体育大学紀要』, 40(2): 57-68.
 - 32) 浦谷郁子, 2014, 「新体操と芸術の関係における一考察—目的スポーツと美的スポーツの区別の過ちについて—」, 『日本体育大学スポーツ科学研究』, Vol. 3: 1-9.
 - 33) ワガノワ: 村山久美子訳, 1996, 『ワガノワのバレエ・レッスン』 株式会社新書館: 東京, 95-98.
 - 34) Векилова, Минкова, 2011, “Стил на Българските народни танци-специфика” НАУЧНИ ТРУДВЕ НА РУСЕНСКИЯ УНИВЕРСИТЕТ, том 50 серия 6.2: 256-261. (ヴェキロヴァ, ミンコヴァ, 2011, 「ブルガリア民族舞踊の形式とキャラクター—特異性」, 『ルセ大学科学論文』, 第50巻 シリーズ6.2: 256-261).